

# 黎錦暉作「毛毛雨」の発表時期をめぐって

西 村 正 男

## I はじめに

黎錦暉（1891-1967）は、「中国流行歌曲の鼻祖」と呼ばれ、中国流行音楽史上最も重要な役割を果たした人物である<sup>1)</sup>。黎は幼少より音楽に親しみ、また中国の国語運動の中心人物であった兄・黎錦熙の影響の下、国語普及のために活動する。1921年に入社した中華書局では、国語教科書の編集の傍ら「国語専修学校」校長を務め、さらには児童向け雑誌『小朋友』を創刊する。

黎錦暉の音楽家としての名声は、この『小朋友』のために創作した児童向け歌劇や児童歌曲に始まると言ってよいだろう。黎はやがて1926年に中華書局から独立し、「中華歌舞専門学校」「明月歌舞団」「聯華歌舞班」等の団体を組織する。その間に、彼は児童向けの歌曲、歌舞劇や愛国歌曲のみならず、数多くのラブソング（当時の中国では「愛情歌曲」「家庭愛情歌曲」などと呼ばれている）の創作を手がけるようになる。そのうち、最も早く作られ、最も人口に膾炙している曲の一つが「毛毛雨」であるが、いったい「毛毛雨」がいつどのようにして創作され、録音され、発表されたのか、その経緯についてはこれまで明らかにされてきたとは言い難い。

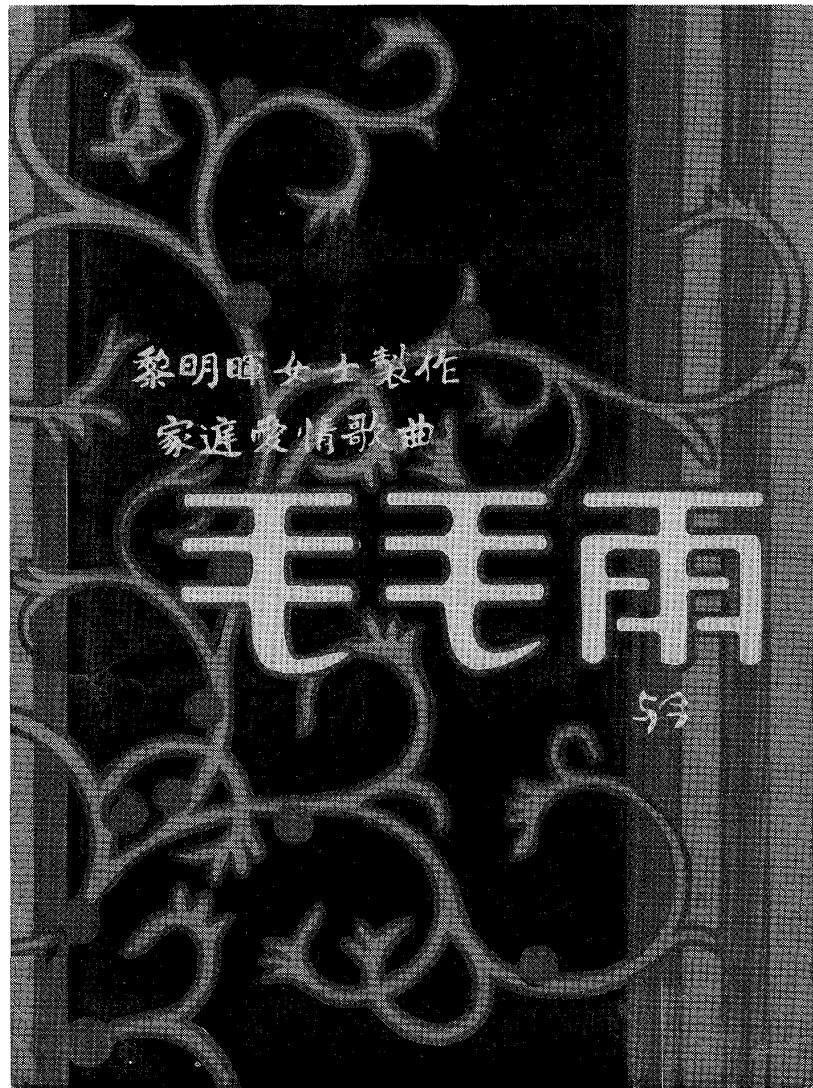
本稿では、黎錦暉の回想と新聞広告等に基づいて、「毛毛雨」の創作・録音・発表時期を検討し、さらに「毛毛雨」がなぜ褒貶相半ばする激しい反響を呼んだのかについても考察したい<sup>2)</sup>。

## II 黎錦暉の回想

本節では、まず国語普及のために児童向けの歌曲や歌劇を創作していた黎錦暉がどのようにしてラブソングの作曲を手がけるようになったのかを、その回想「我和明月社」に基づいて確認したい。

1) 黎の経歴については、以下の文献を参照。黎錦暉「我和明月社」上・下、中国人民政治協商会議全国委員会・文史資料研究委員会編『文化史料』第三、四輯（文史資料出版社、1982、3年）、孫繼南『黎錦暉評伝』（人民音楽出版社、1993年）、Andrew F. Jones, *Yellow Music: Media Culture and Colonial Modernity in the Chinese Jazz Age* (Furham and London: Duke U. P., 2001)。

2) 「毛毛雨」に対する魯迅などの作家の反応については拙稿「中国現代作家と流行歌曲——魯迅、張天翼の事例から」『中国21』Vol. 24（2006）参照。



楽譜『毛毛雨』上海・心弦会1930年2月再版

それによると、彼がはじめて愛情歌曲を創作するようになったのは、彼が中華書局を辞め、中華歌舞専門学校を始めた頃（1926年頃）である。

大衆音楽の中の一部の民謡、曲芸、戯曲〔伝統演劇〕において猥褻すぎる語句を取り除き、外国のラブソングの歌詞の意味や古代の愛を唱った詩詞を使って含蓄の深い愛情歌曲を創作した。古い音楽形式を用いて書いた「毛毛雨」、新しい音楽形式を用いて書いた「妹妹我愛你」「落花流水」「人面桃花」などの小市民の好みに合ったものである。〔中略〕これらのものは当時は出版されていなかったが、「歌専〔中華歌舞専門学校〕の生徒はすでに唱い慣れていた<sup>3)</sup>。

だが、その後しばらくは愛情歌曲の創作を手がけた様子は窺えない。回想記中、次に愛

3) 黎錦暉「我和明月社」下（前掲）、125頁。

情歌曲の創作についての記述が見えるのは、1929年、南洋公演が終わり殆どの団員が離散した後、シンガポールに滞在中の時期である。折しもこの頃、上海の友人が手紙を送ってきた。この友人によると、「毛毛雨」などの六曲の楽譜を正式に出版し、大いに儲かった、とのこと。さらに、南洋で愛情歌曲100曲を創作して上海に送れば、帰国の旅費や中華歌舞専門学校の再建の費用はすぐに解決できる、と勧められた、とのことである。そこで、この勧めを受け入れ、同地で八ヶ月にわたり、「小小茉莉」「夜深深」「特別快車」「桃花江」等100種を創作し、上海に送ったところ、実際その楽譜は大いに売れたというのである<sup>4)</sup>。

ここからは、黎錦暉が「毛毛雨」を出版したのは自らの意志ではなく上海の友人が出版したのだということが読み取れる。また、この文章によるとシンガポールでラブソングを数多く作曲したのも帰国の旅費や中華歌舞専門学校再建費用捻出のためであり、必ずしも彼の積極的な選択ではなかったということになる。この回想記「我和明月社」が書かれたのは、文化大革命前夜の1965年8月のことであり、黎錦暉がこのように記したのは、彼に対する「黄色[猥褻]歌曲の鼻祖」なる批判を少しでも和らげようとする狙いがあったのかも知れない。

以上、黎錦暉がラブソングを作曲した経緯、およびその楽譜の出版について確認した。だが、「毛毛雨」等の彼のラブソングは、単なる楽譜、メロディーとしてだけでなく、レコード録音として、黎錦暉の娘・黎明暉の「猫を絞め殺したような」歌声と共に記憶されている<sup>5)</sup>。従って、中国の流行音楽史を考える上で、「毛毛雨」がいつレコードとして発売されたかということも重要なポイントとなるであろう。黎錦暉は「我和明月社」において、彼が創作した楽曲を楽譜として発表した時期のみならず、レコードとして録音・発表した時期についても比較的詳しく記録している。それに基づいて、彼のレコード録音の流れを以下に整理してみたい。

黎に拠れば、彼が「明月音楽社」の名義でレコード録音伴奏を手がけたのは、1922年が最初である。レコードを発行したのは、彼が在職していた出版社・中華書局であり、録音したのは「葡萄仙子」「可憐的秋香」「寒衣曲」（これらはみな歌舞表演曲に属する）等7枚である。その次に「明月音楽社」の名義で伴奏したのは、黎らが「中華歌舞団」として南洋公演に出かける直前の1928年初め頃であり、嚴個凡、張遇義、嚴工上、嚴折西、孫杏叔、黃繼善、楊九寰と黎自身の八名のメンバーで伴奏した。レコード会社は大中華公司であり、「落花流水」「人面桃花」（この二曲は、愛情歌曲に属する）「月明之夜」「三蝴蝶」「麻雀与小孩」（これらは児童歌舞劇に属する）等十数種を録音したという<sup>6)</sup>。「我和明月社」中、次にレコード録音の記録が見えるのは、南洋から帰国し「明月歌舞団」を組織

4) 黎錦暉「我和明月社」下（前掲）、216-218頁。

5) 「毛毛雨」をこのように評したのは魯迅である。『魯迅全集』第六卷、人民文学出版社、2005年、208頁。また、拙稿「中国現代作家と流行歌曲——魯迅、張天翼の事例から」（前掲）参照。

6) 以上は黎錦暉「我和明月社」下（前掲）、208頁による。

し、上海から北平（北京）・天津へ公演に赴いた1930年のことである。滞在中の北平で、勝利唱片公司（Victor）を紹介され、黎錦暉の弟、黎明により「桃花江」「舞伴之歌」「特別快車」（これらはみな愛情歌曲に属する）の三曲を録音したのである<sup>7)</sup>。さらに同年、東北公演を経て上海に戻った後、大中華唱片公司与契約を結ぶ。1931年に入り、歌舞団員たちの訓練を経て百枚ほどのレコードを録音する。契約では「三蝴蝶」「小小画家」「麻雀与小孩」等の歌舞劇の他、「家庭愛情歌曲」をも録音することになっており、実際に契約通り吹き込まれたと思われる。この成功を受け、勝利公司も数十枚の録音を契約、さらに高亭（Odeon）とも契約し、こうして「家庭愛情歌曲」のレコードが世間に氾濫していったという<sup>8)</sup>。その後、「明月歌舞団」の後身である「明月歌劇社」が1933年頃一旦解散した後、高亭、蓓開（Beka）、百代（Pathé）、勝利等のレコード会社のために作曲をし、歌劇社のメンバーであった白虹、周璇らが吹き込んだという<sup>9)</sup>。さらに、1935年、「明月歌劇社」を再興するも経済的に行き詰まり、同年、勝利唱片公司与契約し40枚のレコードを録音した。内容は、「桃花江」の英国人楽隊、嚴華・周璇の歌による再録音等の幾つかの古い歌の他は新曲で、そのうちの一部はスタジオで即興で作り上げたものだった<sup>10)</sup>。

以上を整理すると、（1）1922年、歌舞表演曲7枚の録音、明月音楽社伴奏、レコードは中華書局発行、（2）1928年、愛情歌曲及び児童歌舞劇十数種の録音、明月音楽社伴奏、レコードは大中華公司発行、（3）1930年初、愛情歌曲3曲の録音、レコードは勝利唱片公司発行、（4）1931年、歌舞劇、愛情歌曲など、100枚ほどを大中華に、数十枚を勝利に、さらに高亭にも録音、（5）1933年頃、歌劇社解散中に高亭、蓓開、百代、勝利等のレコード会社のために作曲、白虹、周璇らの吹き込み、（6）1935年、勝利公司のために40枚のレコードの吹き込み、多くは新曲、ということになる。だが、以上の記述からは、肝心の「毛毛雨」がいつ録音・発表されたのかは明らかではない。次節では新聞広告に基づき、「毛毛雨」のレコードの発売時期を明らかにしたい。

### Ⅲ レコード「毛毛雨」の発売時期

実は、民国期上海を代表する新聞である『申報』を捲れば、レコード「毛毛雨」の発売時期は一目瞭然である。「毛毛雨」のレコードの広告が初めて掲載されたのは、1927年12月15日のことである。発売元は百代公司である。広告によると、レコードはこの12月15日より店頭で売り出されるとのことであった。この時、黎明暉の名義で発売されたのは、両面レコード5枚である。「黎明暉」と歌手の名が大きく記された下には、「特別新曲」「明

7) 黎錦暉「我和明月社」下（前掲）、225頁。なお、原文では、「黎明選録了《桃花江》、《舞伴之歌》和《特別快車》三支歌」とされている。黎明は楽器演奏や歌が得意であったわけではないようなので、彼が果たした役割は、兄に代わって録音する曲の選定や監督・指示をした程度にすぎないと思われる。

8) 黎錦暉「我和明月社」下（前掲）、227-229頁。

9) 黎錦暉「我和明月社」下（前掲）240頁。

10) 黎錦暉「我和明月社」下（前掲）242頁。



黎錦暉「毛毛雨」の再発売盤

月音楽合奏」と記され、さらにその下にレコード番号と題名が記されている。

それによると、レコード番号33776が「妹妹我愛你」（頭段、二段）、33777が「毛毛雨」（頭段、二段）、33778が「麻雀与小孩」（頭段～五段）、33779が「吹喇叭拉鋸」となっており、広告のレイアウトからは、「妹妹我愛你」「毛毛雨」は共に、一枚のレコードの両面を曲の前半（頭段）と後半（二段）が収められていることが分かる。それに対し、「麻雀与小孩」は長編で、二枚のレコードの両面と、もう一枚の片面を費やし、最後の部分（五段）が収められたレコードの裏面に「吹喇叭拉鋸」が収められたようである。このうち、「妹妹我愛你」「毛毛雨」は愛情歌曲に属し、黎錦暉が最初に創作した愛情歌曲である（つまり、レコード番号は一枚のレコードに対して与えられているのではなく、一つの曲に対して一つの番号が与えられているのである）。また、他の曲もすべて彼の作品である。

さて、これらのレコードは1927年12月に発売されており、恐らく1927年後半に録音されたと思われる。これらの録音については「我和明月社」には記されておらず、前節で整理した黎錦暉のレコード録音の六つの時期のうち、第二の時期（1928）よりも少し前に当たる。すなわち、「妹妹我愛你」「毛毛雨」は、1928年の「落花流水」「人面桃花」に先立ち、最初に録音された愛情歌曲ということになる<sup>11)</sup>。広告には、黎錦暉らの「明月音楽合奏」と記されているものの、（少なくとも同じ録音の再発売盤と思われるレコード番号34278の「毛毛雨」を聴く限り）その演奏は当時の中国人の水準を大きく超えた洗練され

11) これまで、黎明暉「毛毛雨」のレコードは1930年前後の発売とする立場もあった。例えば、黄奇智編著『時代曲的流行歲月』（三聯書店（香港）有限公司、2000年）付録のCD解説でも「30年代初」とされている。また拙稿「中国現代作家と流行歌曲——魯迅、張天翼の事例から」『中国21』Vol. 24（2005年）でも、1930年頃の吹き込みと推測した（90頁）。だが、黄氏や筆者が眼にしたレコードの番号は、『申報』の広告にある33777ではなく34278であり、これは恐らく再発売されたレコードだと思われる。

たものであり、実際には百代に雇われた外国人音楽家による伴奏ではないかと思われる（筆者の持つレコード番号34278の「毛毛雨」には、「百代音楽團伴奏」と記されている<sup>12)</sup>）。だとすれば、黎錦暉自身の回想中、「明月音楽社」の名義で伴奏したのは1922年の次は1928年であったとするのは偽証ではなく、ただその間に外国人演奏家によって黎錦暉の愛情歌曲などが録音されていた、ということになるだろう。黎錦暉はこうして、「毛毛雨」のレコード録音・発売時期に言及することを巧妙に回避し、楽譜が自らではなく友人によって出版されたことのみを強調しているのである。

ちなみに、「毛毛雨」が南洋公演以前から発売されていたという事実は、南洋公演の最初の目的地であった香港の新聞からも確認することができる。1928年6月6日、香港華字日報は、「映画、歌舞、新劇のスター」黎明暉と「上海歌舞専修学校新劇団員生」ら数十人がその前日に香港に到着したこと、さらに8日より彼らが公演を行うことなどを伝えている<sup>13)</sup>。翌7日の同紙には、黎明暉の新曲が発売されるという報道がある。そこでは黎明暉が香港で歓迎されていることが述べられた後、次のように記されているのである。

〔前略〕かつて百代公司是、「毛毛雨」「妹妹我愛你」等の曲をレコードに吹き込み、男女が相争って購入した。同社は今回また「春深了」「蝶恋花」「人面桃花」「売花詞」「花長好」「桃李争春」などの六曲を鉄針用レコードに録音した。現在入荷したレコードはみなあつという間に売れてしまい、利益は百倍という<sup>14)</sup>。

ここで、わざわざ「鉄針用レコード」と記しているのは、百代公司是以前は縦振動のダイヤモンド針のレコードを制作していたのを、この頃から一般的な横振動の鉄針用レコードへと切り替えたためであろう。この時発売されたのは、恐らく「毛毛雨」同様、中華歌舞専門学校の時期に黎錦暉が創作したラブソングであり、南洋公演以前に上海でレコードに録音していたことが分かる（これらの録音も「我和明月社」では言及がなかった）。同紙からは確固とした資料は得られなかったが、この南洋公演でも「毛毛雨」やこれらのラブソングが披露された可能性もあるのではないだろうか。

#### IV レコード「毛毛雨」に対する反響の意味

さて、それではどうして「毛毛雨」は（黎錦暉が録音時期について記載を避けるほど）知識人からの批判を含む大きな反響を呼んだのだろうか。

12) ただし、黄奇智編著『時代曲的流行歲月』（前掲）12頁に掲げられた34278番「毛毛雨」のレーベル写真には筆者所有のものとは異なり「百代國樂團伴奏」と記されている。誤植であろうか。

13) 「歌舞新劇団到港」『香港華字日報』1928年6月6日、第三張第二頁。

14) 「黎明暉之新曲」『香港華字日報』1928年6月7日、第三張第二頁。以上、『香港華字日報』の検索には、「香港公共図書館多媒体資訊系統」のウェブサイト <http://hkclweb.hkpl.gov.hk/hkclr2/internet/cht/html/welcome.html> を利用した。

「毛毛雨」の歌詞自体は、今日の日から見ると取り立てて猥褻であるとは思えない。歌詞は、「毛毛雨下個不停」（小雨が止むことなく降りしきっている）から始まり、途中、恋人に対し、あなたの金や銀はいらない、あなたの心が欲しいだけ、と唱い、若い男性を日の出の太陽、若い女性を咲いたばかりの蓮の花にたとえ、「莫等花殘日落山」（花が萎れ日が沈むまで待たないで）と続ける。今日の日から見れば、青春を楽しもうという趣旨のありふれた歌詞のように思えるが、黎錦暉がこれ以前に創作していた児童向け歌曲や歌劇にはない男女間の愛情を読み取ることもでき、あるいはこれが当時としては衝撃的に受けいられたのかも知れない。

だが、この曲に対する反響は、歌詞のみのためではあるまい。魯迅がこの曲を「猫を絞め殺したような」と形容していることは、この曲が楽譜では書き表せないような独特の歌い方や伴奏と共に広まっていたことを物語っているからだ。

それでは「毛毛雨」のレコード録音は何が新しかったのだろうか。それを解くヒントは伴奏にある。先述の通り、これに先立つ1922年の歌舞劇の録音も、「明月音楽社」の名義であり、また「毛毛雨」よりも後となる1928年の大中華への録音も「明月音楽社」の伴奏であった。それに対して、「毛毛雨」は外国人の演奏と思われる、たいへん洗練された伴奏が聞かれる。「百代公司特請黎明暉女士唱毛毛雨」という、当時のレコードの決まり文句であった歌手紹介のアナウンスに続いて、管楽器のアンサンブルが曲をリードしていく。ビッグバンド・ジャズの風味が感じられ、途中ではさらにバイオリンのソロも聴かれるが、それらの洗練された演奏に対抗するかのように黎明暉の素っ頓狂な歌声が響き渡るのである。

ところで、この伴奏を手がけた音楽家はいったい誰なのだろうか。百代会社の伴奏を手がけた音楽家については、いくつかの証言があるので、まずはそれから見てみたい。

まずは、1930年代から活動を開始し、1940年代の上海、50年代、60年代の香港でスター歌手として活躍した姚莉の証言から見てみよう。彼女は、水晶のインタビューに答え、次のように証言している。すなわち、百代会社の上海時代は、楽隊はみな白系ロシア人で百代会社に所属し、演奏の機会があれば行って演奏した。ナイトクラブでは演奏せず、彼らは交響楽団だった、と<sup>15)</sup>。

黎錦暉の弟で、彼の歌舞団で腕を磨いた後百代に入社し「夜来香」等の有名曲を作曲した黎錦光の証言でも、百代会社と白系ロシア人との繋がりが窺える。彼によると、白系ロシア人の作曲家・アヴシャローモフが百代公司以音楽指導を担当していたという。アヴシャローモフが1936年に辞職してからはやはり白系ロシア人のスルツキーが後任となった。黎錦光自身も彼に和声学を教わったという。さらに、白系ロシア人のピアニスト、シ

15) 水晶『流行歌曲滄桑記』（台北・大地出版社、1985）、205-206頁。姚莉はアンドルー・ジョーンズ及び吉村信のインタビューでも、百代の楽隊が白系ロシア人により構成されていたことを述べている。Jones, p. 64. 吉村信「香港生まれの素敵で不思議なラテン・ビート——50～60年代中国歌謡にみるポップ・ミュージックのダイナミズム【上】」『レコード・コレクターズ』1995年6月号、92-93頁。

ンゲル Singer も指揮者として入社し、アレンジなどを黎錦光に教えたという<sup>16)</sup>。してみると、遅くとも30年代前半には、ロシア人音楽家が百代公司と関わっていたことが分かる。

一方、1934年から37年にかけて百代公司の中国音楽の伴奏を手がけ、中華人民共和国成立後は上海市人民政府交響楽団の初代常任指揮者となった黄貽鈞が水晶のインタビューに対して語った回想は幾分異なっている。黄自身は百代公司の録音のうち中国音楽部分を担当したが、西洋音楽の演奏を担当した演奏家の国籍は複雑だったという。ロシア人、ドイツ人、イタリア人（マリオ・パーチ）、チェコ人、ハンガリー人、日本人、フィリピン人等がいたというのである。中国人ははじめは四人であったが、後に六人に増えたとする。中華人民共和国建国時には外国人は十数名を残すのみとなっていて、中国人は逆に三十人あまりへと増えていた。指揮者は当初アリーゴ・フォアであった、という<sup>17)</sup>。この証言は、驚くべき内容を含んでいる。というのも、ここで名前を挙げられたマリオ・パーチは東洋一のオーケストラと称された上海・工部局交響楽団の指揮者として20年もの間君臨していた人物であるからだ。それだけでなく、アリーゴ・フォアもパーチの片腕、交響楽団のコンサートマスターとして活躍し、上海の国立音楽院でも中国人の指導に当たった人物である<sup>18)</sup>。これらが事実であるとする、百代公司の楽隊は、工部局交響楽団とかなりの部分で重なり合うことになる。黄自身は1937年に百代公司を離れてから1938年に工部局交響楽団に加入していて、もしかするとインタビュアーである水晶が、百代公司の話と工部局交響楽団の話を混同してしまった可能性はあるだろう。だが、そうだとすると、黎錦光の回想から1930年代には著名な白系ロシア人が百代公司に貢献していたことは疑いない。

「毛毛雨」の時期に録音に関わっていたのが誰であるのかは具体的には分からない。ただ、この録音以来、中国の流行歌曲に西洋音楽の伴奏を付けることは一般的になっていったことは間違いなく、それはこの後多くの西洋人音楽家が百代公司に関わることから明らかである。恐らく、本格的な西洋人の楽団による伴奏を伴った中国のレコード録音は、「毛毛雨」が初めてであっただろう。それ以前の黎錦暉の児童歌曲などを僅かながら耳にした限りでは、ピアノなどの必要最小限のシンプルな伴奏にとどまっていた。「毛毛雨」では、楽団の圧倒的なボリュームの前に、歌手の黎明暉はどのように歌えばよいのか戸惑ったのではないだろうか。「猫を絞め殺したような」歌い方は、そのような戸惑いの末に選択されたのではないだろうか。

音楽的に見れば、「毛毛雨」は、西洋人の本格的な楽団を伴った点が新しかった、ということになるだろう。では、メディア史の視点から「毛毛雨」を見るとどうなるだろう

16) 水晶『黄絨虎与西門町』（台北・大地出版社、2000）、231-232頁。なお、アブシャローモフやシロツキーに関しては、榎本泰子『上海オーケストラ物語——西洋人音楽家たちの夢』（春秋社、2006）に言及があり、略歴などが紹介されている。

17) 水晶『黄絨虎与西門町』（前掲）、226-227頁。

18) 榎本泰子『上海オーケストラ物語——西洋人音楽家たちの夢』（前掲）参照。



か。これまで見てきたように、「毛毛雨」は楽譜よりもレコードが先に出版された。またレコードには、楽譜には書き表せない「猫を絞め殺したような」歌い方や、ビッグバンドのアレンジ、ノイズが記録されていた（ちなみに、後から出版された楽譜には、メロディとピアノの伴奏のみが記されている）。そして、人々は、楽譜に基づいて楽曲を受容し論評するのではなく、その伴奏や歌い方を含めた特定の音の連なりとして「毛毛雨」という楽曲を認識したのである。黎錦暉は、以前は中華書局に勤めながら、児童雑誌『小朋友』の誌上に、あるいは単行本として楽譜を発表してきた過去を持つ。だが、ここへ至って、楽曲は書物ではなく、レコードという、大量に同一の音を複製し、同一の音を全国各地へと拡散させる可能性を持ったメディアによって流通することになったのである。レコード「毛毛雨」は、単なる楽譜の再現ではなく、楽譜には書き留められないレコードの音自体が商品価値を持つ中国流行歌史における最初の事例だったといえよう。魯迅の「毛毛雨」に対する反感は、文字によって思想を書き表していた知識人として、この新たな複製技術が人々に働きかける力を敏感に感じ取ったためではなかろうか。

## V まとめ

黎錦暉は、回想中では中国最初の流行歌曲とされる「毛毛雨」のレコード録音時期について巧妙に言及を避けていた。だが、新聞調査により、「毛毛雨」は彼が南洋公演に出発する前年の1927年には発売されていたことが明らかになった。それでは、この「毛毛雨」はなぜ大きな反響を呼び、魯迅を初めとする知識人から批判されることとなったのか。そのことは、この楽曲がレコードというメディアを通じて広まったことと無縁ではないだろう。レコードは西洋人音楽家の楽団により演奏され、黎錦暉の娘、黎明暉の独特の歌声と共に記憶されている。つまり、この曲に至って、レコードは単なる楽譜の再現であることを止め、楽譜に書き留めることのできないレコードの音自体が価値を持つようになったのである。

## 关于黎锦晖所作《毛毛雨》的出版日期

西 村 正 男

本文将探讨黎锦晖所作《毛毛雨》的出版日期，并初步分析该歌曲所引起的激烈反响的原因。黎锦晖在回想录《我和明月社》里提到了他在南洋公演时某一上海朋友替他出版了该曲的乐谱，但文章里没有写明《毛毛雨》唱片的出版日期。我们从当时的报纸里可以查到《毛毛雨》唱片的广告，从而确定它的出版日期是他去南洋公演之前，1927年12月15日。

那么，这首歌曲为何受到了知识分子的严厉批判呢？其原因应该跟这首歌曲通过唱片这一媒体而遍及全国的事实有关。该唱片是由西人乐队伴奏，由黎锦晖的女儿黎明晖演唱，而黎明晖的“绞死猫似的”歌声也脍炙人口。这张唱片的出现意味着，唱片从此不再只是乐谱的再现，而唱片里所纪录的声音本身从此有了价值。